

# なぜ体育授業に参加し続けるのか

## －内発的動機づけに着目して－

武井 栞（鳴門教育大学）

### 1. 目的

本研究では、体育嫌いの児童が体育授業に参加し続ける様子について自己決定理論に着目しながら授業観察を行い、児童を取り巻く環境や状況等からその要因を考えていくことを目的と定める。

### 2. 研究方法

以下を対象に授業観察を行った。授業観察に先立ち、本研究についての趣旨説明を行い、了承を得た上で授業観察に臨んだ。

- 1) 対象授業：小学校6年生「走り高跳び」
- 2) 期間：令和4年11月29日～12月14日
- 3) 授業観察校：徳島市T小学校
- 4) 対象児童：体育嫌いの児童3名（A・B・C）
- 5) データ収集方法：まず、アンケートを実施し、対象児童3名の動機づけを分析したところ、児童Aは外的調整、児童Bは無動機づけ、児童Cは同一化的調整であった。次に、授業観察を行い記録をとり、テキストデータとして整理した。
- 6) 分析方法：鯨岡(2005)のものを援用し、エピソード法を用いて分析を行った。

### 3. 結果と考察

#### 1) 児童A

児童Aは、2・3時間目で高さを調節する様子や助走の歩数を調節する様子、6時間目でロイター板を用いて踏み切りを工夫している様子が見られた。このことから児童Aは、授業を通して跳ぶことに面白さを感じることができたため、跳び方を自分なりに工夫しているのだと捉えた。これらのことから、児童Aの動機づけは内発的動機づけへと移行したと解釈した。

#### 2) 児童B

児童Bは、単元を通して、友達の後押しや励

ましによる挑戦が多く見られた。このことから、児童Bの動機づけは外的調整へと移行したと解釈した。また、児童Bが参加し続けるためには、友達との関わりなどの外的なものが必要なのだと捉えた。

#### 3) 児童C

児童Cは、3時間目で友達との競争を楽しみながら高さに挑戦する様子が見られ、1・2時間目に比べて挑戦回数が大幅に増加していた。このことから、児童Cの動機づけは内発的動機づけへと移行したと解釈した。しかし、4時間目以降、友達が見学・欠席すると、自分から参加しようとしないう様子が見られた。児童Cにとって、友達との関わりなどの外的なもの強く影響しているため、内発的動機づけの状態が続かなかったと解釈した。このことから児童Cが参加し続けるためには、友達との関わりなどの外的なものが必要なのだと捉えた。

### 4. 結論

本研究により、単元初めから内発的動機づけによる参加でなくても構わないのだと気付くことができた。体育授業を実践する際、授業開始時に無動機づけや外発的動機づけによって参加している児童がいることは当然であるということを教師が理解しておく必要がある。また、体育嫌いの児童も参加し続けられるような授業を実践するためには、友達との関わりのような外的なものが必要であり、児童が外的なものに関わる様子を教師がしっかりと認めていくことが重要である。

### 5. 参考文献

- 1) 鯨岡峻(2005), エピソード記述入門 実践と質的研究のために, 東京大学出版会, pp.253